神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告3:41～44.2005

高等学校英語における自己学習力を育む指導法の研究

── 学習意欲を高める評価方法の工夫を中心に ──

杉　山　　肇[1]

現在、学習の成果だけでなく、指導過程における生徒の取組に対する評価も重視され、生徒の学習意欲向上にいかされる評価が求められている。本研究では、自己評価を中心に、個人内評価、相互評価等を取り入れた授業実践を行い、英語に対する学習意欲との関係を考察した。

はじめに

文部科学省は、高等学校卒業段階で英検準２級～２級程度のコミュニケーションができることを目標として示しており、高等学校の英語教育は、初等・中等教育の最終段階として、重要な役割を果たすべきものと考えられる。しかしながら、国立教育政策研究所「平成14年度高等学校教育課程実施状況調査の結果概要について」(2004)によると、「英語の授業がわかる」高校生の割合は、中学生よりも低く、「『学習意欲に関する調査研究』概要」(2002)には、高校生が勉強に対して「やる気がなくなる」理由として、「授業がわからないとき」という回答が多いことが示されている。

高等学校においても観点別評価が取り入れられ、生徒の情意面に関する「関心・意欲・態度」の評価も必要とされている。「関心・意欲・態度」が「努力を要すると判断される」状況にある場合には、指導と評価の一体化という観点から、生徒に意欲をもたせるように、指導を改善することが求められている。

こうした現状を踏まえ、高等学校の英語の学習において、生徒の学習意欲を高めるための指導と評価の工夫を行うことは、早急に取り組むべき課題と考え、研究テーマを設定した。

研究の内容

1　学習意欲と評価

学習者が自己評価を行うことで、学習意欲が高まることが示唆されており(桜井 1997)、適切な自己評価を行うためには、他者評価の基準を取り入れ、自分の基準をもつ必要があると指摘されている(安彦 1987 p.115)。したがって、他者評価を取り入れた自己評価活動により、生徒の学習意欲が高まると考えた。また、到達目標を明示した上で自己評価を行えば、生徒は達成感を味わい、学習意欲が高まると考えた。以上の点から、本研究では次の仮説を設定し、検証を試みた。

仮説：「目標を明確にした授業計画を立て、自己評価を中心に、他者評価を取り入れた授業を行うことで、生徒の英語に対する学習意欲が高まるだろう。」

2　研究の進め方

(1)研究の流れ(第1表)

アンケートおよび授業は、神奈川県立新磯高等学校第２学年３クラス(２クラス３展開の少人数クラス)在籍69名を対象に行った。事前にアンケートⅠを実施し、効果的な他者評価の考察、授業実践前の生徒のデータ収集を行い、授業の題材決定にいかした。

11回の授業を実施し、自己評価を中心とした各種の評価を行う中で、生徒の学習意欲の変化を観察することができた。自己評価は毎回、相互評価は第５回と第11回、個人内評価は第11回授業後に行った。形成的評価は第５回授業後の「個人票」と毎時間の自己評価票に記入した。第11回授業終了後にアンケートⅡを実施し、アンケートⅠとの比較および今回の授業実践と学習意欲の関連を調査した。

第１表　研究の流れ

		内　　容	
7/15		ｱﾝｹｰﾄⅠ	実施担当者:筆者　時間:50分
第Ⅰ期授業	9/16	第1回授業	授業者:筆者　時間:50分　授業の説明 教材・CD配付　第１回授業 「個人の目標」設定　　自己評価
	9/17～	第2回授業～第4回授業	授業者:所属校教諭　時間:20分 自己評価
	9/30	第5回授業	授業者:筆者　時間:50分 「ペアで会話」　　ビデオ撮影 相互評価　自己評価
10月初旬		形成的評価	「個人票」配付
第Ⅱ期授業	10/8～	第6回授業～第10回授業	授業者:所属校教諭　時間:20分 自己評価
	11/4	第11回授業	授業者:筆者・ALT　時間:50分 「ALTと電話で会話」ビデオ撮影 相互評価　自己評価　個人内評価
11/11		ｱﾝｹｰﾄⅡ	担当者:筆者　時間:50分

(2)アンケートⅠの結果から

回答結果から、英語が好きではない生徒が多く(58

1　県立新磯高等学校
　研修分野（英語）

%)、英語の学習に取り組めていない生徒が約４割(37%)おり、そのうちの約７割の生徒が「何を勉強すべきかわからない」という理由であることがわかった。「英語の学習をしたいと思う」ときは、「授業が理解できたとき」など、達成感に関する回答が多く、逆に「英語の学習をしたくなくなる」のは、他人との比較による評価を受けたときとの回答が多かった。

(3)授業実践上の留意点

アンケートＩの結果をもとに、次の点を授業計画の中に取り入れた。

ア　指導目標の明示と生徒による「個人の目標」設定

「単元の目標」「毎時間の目標」を一覧表にし、生徒が取り組むべき事柄を、常に意識して学習できるように配慮した。また、各生徒に「個人の目標」を設定させ、自主的な取組を促した。

イ　生徒の自己評価と筆者から生徒へのコメント

生徒は、毎時間「振り返りシート」(自己評価票)を記入し、筆者が生徒の記述を読み、学習状況を把握して、各生徒にコメントを記入して返却した。「振り返りシート」は第２表の項目を取り入れて作成した。

第２表　振り返りシートの項目

①単元の目標	②単元の目標達成のための計画
③授業への参加状況	
④授業の目標達成の規準と達成度	
⑤予習・復習の有無	
⑥意欲的に参加できなかった場合の原因	
⑦反省や次回の授業に向けてなどの生徒の自由記述	
⑧質問欄	⑨教員のコメント欄

(安彦1987 pp. 121-131、梶田 1983 pp. 100-106を参考に作成)

ウ　筆者による個人内評価と生徒同士による相互評価

個人内評価は、第５回と第11回の授業で撮影したビデオを比較して行った。第５回の会話を基準に、第11回での各生徒の進歩を「振り返りシート」の教員のコメント欄に記入して返却した。生徒同士の相互評価は、結果を相互評価票に記入し、お互いに交換して行った。

エ　筆者による形成的評価

第５回授業終了後、その時点での生徒の目標達成状況と今後取り組むべき努力目標を「個人票」にし、各生徒に渡した。また、この評価をもとに、第Ⅱ期授業における授業計画の見直しを行った。

なお、各評価方法の説明は第３表のとおりである。

第３表　各評価方法について

個人内評価（縦断的個人内評価）
　各生徒の過去の成績や記録と比較して、どの程度進歩したかを、生徒ごとに評価する方法。（鹿毛1997 p. 145）
相互評価
　他の生徒が評価主体となり、生徒同士が評価し合う方法。（鹿毛1997 p. 146）
形成的評価
　「ある内容の指導・学習過程において、個々の具体的な内容を、生徒が身につけたかどうか、また、どの程度身につけたか、さらにはどこに補充指導すべき課題を残しているかといった情報を求め」(宮島 2003)指導の改善や生徒の学習の動機づけにいかす評価方法。

(4)授業について

単元の目標を「電話で対話をすることができる」「電話でよく用いられる表現を理解する」とし、主に「ペアでの会話」と「ＡＬＴとの会話」によって評価を行った。単元の評価規準は第４表のとおりである。

第４表　単元の評価規準

	ア　関心・意欲・態度	イ　表現の能力
単元の評価規準	「言語活動への取組」 ①自ら学んだ表現などを使って話している。 ②ペアワークにおいて積極的に協力し合っている。 「コミュニケーションの継続」 ③交互に話し手や聞き手として対話が続くように協力し合っている。	「正確な対話」 ①話そうとすることを相手に正確に伝えている。 「適切な対話」 ②電話において、話題や相手に応じて対話を始め、継続し、終わらせている。 ③適切な速さや声の大きさで話している。
	ウ　理解の能力	エ　知識・理解
	「正確な対話」 ①電話の内容について正しく聞き取っている。	「言語についての知識」 ①電話での会話で用いられる基本的な表現の知識を身につけている。

毎時間の教材は「Ａ基本的な対話」「Ｂ応用表現」「Ｃ携帯電話の表現」で構成して作成し、Ａは全員必修、Ｂ・Ｃは各生徒の興味・関心に応じて選択して学習できるものとした。また、「Ａ基本的な対話」を録音したＣＤを、家庭学習用に全生徒に配付した。

第２回～第４回、第６回～第10回の授業は、50分の授業時間のうち20分を使い、所属校教諭が行った。ただし、第９回・10回の授業は、形成的評価の結果を受けて50分で実施した。

(5)第Ｉ期授業(形成的評価まで)と生徒への指導

ア　第1回～第4回授業

第５回「ペアで会話」に向けて、ペアワークを中心にした授業を行った。生徒の緊張を取り除き、会話ができる雰囲気をつくるため、会話は４～６人のグループに分かれて行うこととした。

イ　第5回授業と評価

生徒はペアで会話を行い、生徒同士による相互評価と、筆者によるビデオ撮影を行った。後日、ビデオをもとに「関心・意欲・態度」の評価規準①「自ら学んだ表現などを使って話している」を中心に評価した。

生徒が教材の「Ａ基本的な対話」を参考に、教材を見ずに会話できた場合を評価Ｂ、できなかった場合を評価Ｃとし、教材の「Ｂ応用表現」や生徒が独自に考えた表現を用いて会話できた場合を評価Ａとした。参加生徒62人中51人が評価Ｃ(教材を見ながらの会話であったため)、９人が評価Ｂ、２人が評価Ａであった。

ウ　形成的評価と指導の見直し

形成的評価として、第５回授業終了時点での、単元と個人の目標達成状況と、今後の努力目標を個人票に記入して、生徒に渡した。

ほとんどの生徒が評価Ｃであったことを踏まえて、「個人票」では、努力目標として今後取り組むべきことを明確に伝え、第６回以降の「振り返りシート」に

は、各生徒に応じた学習の仕方や励ましを記入した。授業者は、生徒と共にペアワークに参加するなど、生徒が積極的に会話を行うことができるように支援を行った。さらに、形成的評価の結果により、生徒が実際に会話を行う機会を増やす必要があると考え、授業者が生徒と１対１で会話を行うことができる時間を確保するために、第９回と第10回の授業時間を20分から50分に変更した。

(6)第Ⅱ期授業(形成的評価後)と生徒への指導

ア　第6回～第10回授業

授業者からの報告と「振り返りシート」の記述から、第５回で評価Ｃの生徒も、ＡＬＴとの会話を行うことができそうな状態になり、評価Ａ・Ｂの生徒は、会話に自信をもつことができた様子であることがわかった。

イ　第11回授業と評価

生徒はグループに分かれ、一人ずつ、ＡＬＴと会話を行い、生徒同士の相互評価を行った。筆者は、各生徒の会話をビデオで撮影し、第５回の会話と比較して、生徒ごとの個人内評価を行った。

第５回同様「関心・意欲・態度」の評価規準①「自ら学んだ表現などを使って話している」を、Ａ～Ｃで評価したところ、61人中10人が評価Ｃ、51人が評価Ｂ、評価Ａは該当なしであった。

ウ　個人内評価

第５回と第11回の両方の授業に参加した54人の生徒の会話をもとに個人内評価を行った。各生徒の状況は第５表のとおりである。

第５表

第５回	第11回	人数
Ｃ	Ｂ	37人
Ｂ	Ｂ	7人
Ｃ	Ｃ	8人
Ａ	Ｂ	2人

①Ｃ→Ｂの生徒は、第５回は教材を見ながらの会話であったが、第11回は教材を見ずに会話ができた。

②Ｂ→Ｂの生徒は、速さや声の大きさなどの点が改善された生徒が多かった。

③Ｃ→Ｃの生徒８人のうち６人は、第５回：「完全に教材を見ながらの会話」から第11回：「一部を教材を見ながらの会話」へと若干の進歩が見られた。２名は前回からほとんど進歩が見られなかった。

④Ａ→Ｂの生徒は、今回、教材の「Ａ基本的な対話」を用いた会話であったため、評価Ｂとなった。

評価Ｃが減少した理由として、「個人票」に努力目標を示し、「振り返りシート」に生徒に応じたコメントを行ったこと、また、第Ⅱ期授業を一部変更して「復習の時間」を十分に取り、授業者が生徒一人ひとりに対応する指導を行ったことが考えられる。

必要な指導を、適切な時期に行うことが指導の基本であることを再認識させられた。

３　アンケートの結果と仮説の検証

アンケートⅡの結果分析および、アンケートⅠ・Ⅱに共通の質問項目の比較から、今回の授業実践と学習意欲の関係について考察し、仮説の検証を試みた。

(1)アンケートⅡの結果

今回の授業実践と学習意欲について、生徒の回答結果は第６表のとおりである。

第６表　アンケートⅡの結果(抜粋)

目標の明示	
単元の目標が明示されていることで、学習意欲が高まった。	82%
毎時間の授業の目標が明示されていることで、学習意欲が高まった。	80%
「個人の目標」を設定したことで、学習意欲が高まった。	77%
自己評価	
自己評価で目標達成度合を確認して、学習意欲が高まった。	80%
自己評価でその日の学習で不十分だった点を発見し、次はその点を頑張ろうと学習意欲が高まった。	77%
「振り返りシート」に書かれた先生からのコメントを読んで学習意欲が高まった。	82%
相互評価	
生徒同士の相互評価を行って、学習意欲が高まった。	69%
形成的評価	
第５回の時点で達成できた目標を先生に認められることで、自信がもてた。	79%
今後の努力目標を示されて、学習意欲が高まった。	75%
個人票に示された努力目標に取り組むことができた。	81%
個人内評価	
自分自身の進歩を認められて、学習意欲が高まった	89%

ア　目標の明示と学習意欲

「目標の明示」については、半数以上の生徒に「毎時間やることが決まっていたのでやる気が出た」という内容の記述が見られた。また、毎時間の目標を一覧にして示したことにより、何を、いつまでに行えばよいかという意識をもち、全体を見通して計画的に学習できた生徒もいた。

イ　自己評価と学習意欲

目標が明示されているため、自己評価による目標達成の確認も行いやすかった様子である。また、その日の学習で不十分な点を自覚し、克服しようとする意識をもつことができているが、これには、生徒の記述に対して、一人ひとりの生徒に合わせたコメントを行ったことの効果もあったものと考えられる。

ウ　生徒同士の相互評価と学習意欲

生徒同士の「相互評価」は友人からの評価であるため、素直に受け止められるという記述が見られた。

エ　形成的評価と学習意欲

「個人票」に記入した努力目標に取り組めた生徒が約８割いた。指導の過程で、生徒の学習状況を把握し、個々の生徒に対して、単元の目標達成のために取り組むべき事柄を明確に示すことは、生徒の学習を促す効果があったものと考えられる。

オ　個人内評価と学習意欲

「個人内評価」によって学習意欲が高まった生徒の割合が最も高い。各生徒は自己評価により、ある程度自分自身の進歩を感じていたが、他者(筆者)からも認められることで進歩を確信し、学習意欲が高まったものと考えられる。

(2)アンケートⅠとⅡの比較(抜粋)

第７表　アンケートⅠ・Ⅱの比較

アンケートⅠ:回答60名　アンケートⅡ:回答67名	アンケートⅠ	アンケートⅡ
英語が好き。	6人	14人△
英語の学習に積極的に取り組んでいる。	12人	17人△
成績に影響するので英語の学習に取り組んでいる。	18人	13人▼
何をすべきかわからないため英語の学習に取り組んでいない。	16人	13人▼
授業のねらいがはっきりしていて何をすべきかがわかると、英語の学習に取り組む気になる。	5人	13人△

＊△前回より人数が増加　▼前回より人数が減少

「授業のねらいがはっきりしていて何をすべきかがわかると、英語の学習に取り組む気になる」と回答した生徒が、約３倍に増加した。(第７表)　その理由は、13人の生徒の記述から、「目標が明示されているため、適切な自己評価を行うことができ、達成感や進歩を感じ、学習意欲につながった」とまとめることができる。今回の授業実践の効果があったものと考えられる。

(3)仮説の検証

アンケートⅡの結果に示されているように、「目標の明示」および「自己評価を中心に各種の評価方法」を取り入れた授業実践によって、約８割の生徒が「学習意欲が高まった」と回答している。

授業においても、第５回授業の時点では「教材を見ずに会話はできない」と考えていた生徒が多かったが、第６回以降、「振り返りシート」記述によると、授業の復習をした生徒が増加し、第11回では８割以上の生徒がＡＬＴと会話を行うことができた。

また、アンケートⅡの質問で、授業以外の場で英語を勉強したと回答した生徒は、授業実践前は21％であったが、授業実践中は31％になり、今後、授業以外の場で英語を勉強したいと回答した生徒は50％を超えた。生徒に、自ら学ぶ姿勢が育まれつつあると考えられる。

以上の点から、目標を明確にした授業計画を立て、自己評価を中心に、他者評価を取り入れた授業を行うことで、生徒の英語に対する学習意欲を高めていくことができるものと考えられる。

4　成果と課題

(1)成果

ア　「振り返りシート」(自己評価票)記述欄の意義

「振り返りシート」の記述から生徒の変化を読み取り、すぐにアドバイスを行うことで、生徒の取組が改善されたケースがあった。一面的にはとらえにくい生徒の意欲を引き出す手だてになりうると実感した。

イ　「目標の明示」と「自己評価」の有効性

目標を明示した上で自己評価を行うことで、各生徒は、自分がどの段階の何ができていて、何ができていないのかを把握できた様子であった。スキルを積み重ねて実践的コミュニケーション能力を伸ばしていく英語の学習を進める上で、目標の明示と自己評価は有効な方法であると考えられる。

ウ　指導の見直し

今回、形成的評価の結果を受けて、第Ⅱ期の指導を見直し、評価結果に応じた個別指導を取り入れた結果、第11回授業では、評価Ｃの生徒が大幅に減少した。評価結果を次の指導にいかすことで、生徒の学習意欲を高めることにつながることを実感した。

(2)課題

今回、各生徒は「個人の目標」を設定し、達成感を味わうことができたが、「学校として生徒に身につけさせたい英語力」という目標もあるため、それに向けての適切な個人の目標のあり方、設定のさせ方が課題として残った。

また、今回は「話すこと」を主体とした授業実践からの成果であったが、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を主体とした授業における、学習意欲向上に効果的な指導と評価のあり方、および評価結果に応じた適切な指導法について、研究を深めることも今後の課題である。

おわりに

今回の研究では、評価主体の異なる評価を取り入れた指導を試み、評価によって得られた結果を指導の改善にいかすことで、生徒の英語の学習意欲が高まったという結果を得られたと考えている。この研究をきっかけに、今後も評価に関する研究を深め、指導と評価の一体化の視点をもちながら、生徒に意欲をもたせる指導法を学び、実践していきたいと考えている。

引用文献

宮島邦夫 2003 橋本重治原著『教育評価法概説』図書文化 p. 108

参考文献

国立教育政策研究所 2002 「『学習意欲に関する調査研究』概要」 http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/seika0208_01.htm (2004/05/16 取得)

国立教育政策研究所 2004「平成14年度高等学校教育課程実施状況調査の結果概要について」http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h14/H14_h/summary.htm (2004/05/16 取得)

安彦忠彦 1987 『自己評価』 図書文化

鹿毛雅治、奈須正裕 1997『学ぶことと教えること』金子書房

梶田叡一 1983 『教育評価』有斐閣双書pp. 100-106

桜井茂男 1997 『学習意欲の心理学』誠信書房p. 103